Osaka University Knowledge Archive

Title	在日韓国・朝鮮人のがん疫学研究
Author(s)	生方, 享司
Citation	大阪大学, 1987, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/35825
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

【3】

氏名・(本籍)	生方享司（うぶかたたかし）
学位の種類	医学博士
学位記番号	第 7786 号
学位授与の日付	昭和62年5月11日
学位授与の要件	学位規則第5条第2項該当
学位論文題目	**在日韓国・朝鮮人のがん疫学研究**
論文審査委員	(主査) 教授 朝倉新太郎 (副査) 教授 北村 旦 教授 森 武貞

論文内容の要旨

［目　的］

移民におけるがん発生状況の研究は，がんの要因を解明する上で貴重な資料を提供する。すなわち，移民は「自然の実験」として，生活環境上の変化を受けた集団であり，移民に発生したがんの分布を母国および移住国のそれと比較することにより貴重な知見を得ることができる。今回，日本に在住する韓国・朝鮮人（以下在日）のがんの分布を，日本人および本国のそれと比較した。また，がん分布の差異に関連する要因を明らかにするため，ライフスタイルを中心とした調査を日本（大阪）および韓国で実施した。

［方　法］

1．在日と日本人のがん訂正死亡率の比較

在日は全国で約56万人，このうち約16万人が大阪に在住する（大阪府人口の2％）。1973年～78年の大阪府分の死亡小票を閲覧し，1979～83年は人口動態死亡テープを使用して1973年～83年の韓国・朝鮮籍の者のがんの部位別，性，年齢階級別死亡数を得た。人口は1970年，75年，80年の国勢調査人口より推計し，直接法による年齢訂正死亡率を算出した。これを日本人（大阪府）のそれと比較した。

2．在日と韓国人のがん罹患の比較

韓国では死亡統計の精度が充分でないため，訂正死亡率により比較することができない。そこで，韓国の教育病院約60施設が参加しているHospital－basedの韓国がん登録を用い，1980－84年の部位別，性，年齢別のがん罹患数を得た。在日の調査には大阪府がん登録資料を用いたが，届出票には国籍欄がないため，手作業で姓名を手がかりに韓国・朝鮮人を選び出した。以上より，大阪府一般人口の部位別，

性，年齢別罹患数を基準として，在日および韓国人の標準化割合死亡比Standardized Proportional Incidence Ratios，ＳＰＩＲを算出した。

３．ライフスタイルの調査

飲酒，喫煙，食生活，出産歴等のライフスタイルに関する調査を自記式アンケート調査により実施した。在日は大阪府下の民族学校の20歳以上の父兄を対象とし，有効回答数2,903人（回答率61.8%）をえた。大阪の在日の約半数は，済州道出身であるため，韓国での調査は済州道住民に対し同様の方法で行った（有効回答数4,010人，回答率74.3%）。

［結　　果］

１．在日男で訂正死亡率が最も高いのは肝癌（10万人対68.9），次いで肺（44.1），胃（42.8），大腸（13.6），食道（10.7），女は胃（17.4），肝（12.3），子宮（11.8），肺（10.8），大腸（7.1）の順になった。日本人より有意に高率であった部位は，男の食道（死亡率比1.5），肝（3.0），肺（1.6）で，女では肝（1.9）であった。逆に有意に低かった部位は，男で胃（0.8），女では食道（0.5），胃（0.6）および乳房（0.6）であった。

２．在日のがん罹患が本国と比べ高かった部位は，男の食道，大腸，肝，肺，女の大腸，肝であった。逆に低かったのは男女の胃と女の子宮であった。乳がんでは，ほぼ等しかった。

３．各集団のライフスタイルを比較すると，喫煙率は韓国人男70.5%，在日65.9%，日本人62.5%の順になったが，喫煙開始年齢が20歳未満の者は，在日で27%，韓国はわずか４%であった。また，重喫煙者の割合は，在日が46.3%と高く，韓国は14.6%と低かった。飲酒者率は，在日男が最も高く（毎日飲酒者は73.4%），日本人（57.1%），韓国人（15.8%）の順になった。３合以上の大量飲酒者は，在日28.9%，日本人13.3%，韓国人9.0%であった。韓国人女は飲酒者率，喫煙者率とも極めて低かったが，在日女は日本人女と同程度になった。在日の初産時年齢は日本人に比べ約５歳若くなった。在日の食生活パターンは，本国より日本人に近似していた。

［総　　括］

在日の食道癌は日本人と比べ死亡率の性差が大きく，在日男で飲酒・喫煙率が高いことによるものと考えた。在日の胃がんは韓国に比べリスクが低く，逆に大腸がんではリスクは高くなっていた。これらは，食生活の西欧化によるものと推定した。在日の肝がんは極めて高率で，この要因として高いＨＢｓ抗原陽性率に加え，飲酒による影響を考えた。肺がんは在日が最も高く，日本人と韓国人は差がなかった。喫煙率は韓国人が在日よりやや高率であったが，後者の喫煙開始年齢が若いこと，重喫煙者が多いことが肺がん死亡率を高くしていると考えた。乳がんは在日と韓国人では差がなく，両者は日本人より低率であった。在日の初産時年齢が若いことが一因として考えられた。子宮がんは本国に比し，在日の減少が著明であった。

以上の諸成績より，在日のがん発生パターンは，韓国でのそれと異なっていることを認め，その要因として，移住に伴う生活環境の変化が大きな役割を果たしていると推定した。

論文の審査結果の要旨

移民のがん疫学調査は，がんの要因解明の一助となりうる。

本研究は在日韓国・朝鮮人のがんパターンを本国および日本人のそれと比較し，さらにライフスタイルの調査を日本と韓国で実施したものである。

この結果，在日韓国・朝鮮人のがんは本国に比べ食道（男），大腸（男女），肝（男女），肺（男）でリスクの上昇がみられ，胃（男女），子宮（女）で減少をみとめた。これらのがんパターンの変化は喫煙，飲酒，食生活，妊娠等，移住に伴うライフスタイルの変化と関連していることをみとめた。

本研究は日本における本格的な移民がんの疫学研究としてはじめてのものであり，がん発生パターンと環境要因との関連を強く示唆するもので，学位に価するものと思われる。